

たいきさつを語ってくれた。西谷囃子保存会がつくられた時に、囃子の指導ができる人は白井さんの外は一人しかいなかった。今では保存会は十二人ぐらいになっており、白井さんほか二人が指導にあたっている。「三十歳ぐらいからやり始めた人ばかりなので、なかなかおぼえられない。その上、練習も決められた練習日しかやらないので、なかなか上達しない。私たちがおぼえ始めた時は、一日中仕事をしながらも練習したのですが、今はほかに楽しめるものがたくさんありますから」と西谷囃子の伝承もなかなか苦労が多いようだ。

保存会の主な活動の場は、九月に

おこなわれる富士山神社の祭礼と正月の獅子舞と賀詞交換会である。このうち正月の獅子舞は、一度やめていたが、地元の人から、「獅子舞が来ないと正月の気分がしないので、ぜひやってくれ」といわれてやり始めた。保存会は会員の一人の小屋を借りて、今も練習にはげんでいる。

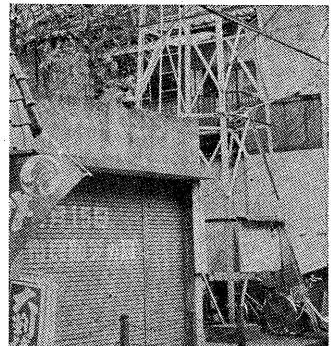
「とにかく、昔から伝わった民俗芸能が再び受けつがれていくことができてよかった」と白井さんはしみじみ語った。一度とだえると復活することは非常にむづかしいからと…。

消防小屋の移転問題にゆれて

西谷囃子保存会のメンバーのうち、農家の人はほとんどが消防団に入っている。西谷町消防団は現在二十二人。西谷町の中で農業を続けているのは十四戸であり、全ての農家は消防団に入っている。消防団こそ西谷町の農家―地付きの人の友好の場となっている。消防団の活動の拠点である消防団器具置場（以下消防小屋と呼ぶ）が今移転の憂き目にあ

っている。

消防小屋と火のみやぐら



消防小屋が移転しなくてはならなくなっただけで、地区センター建設が起因となっている。地区センター用地を買収する過程で、地主から消防小屋と火のみやぐらの用地の返還が条件に出されてきた。当時、地区センター建設に全面的に協力してきたのが連合町会であった。このため、

連合町会は消防団と協議し、協力するとう消防団の言葉を頼りに、連合町会の責任で地主に返還の約束をした。西谷地区センターが建設された現在、あらためて消防小屋をどこに設置するかという大きな課題を連合町会は課せられた。これが今までの経過である。

「今までに消防小屋は三回ぐらい移転をしている。私が消防団長をし

ている時に今の所に移転した。確か昭和二十年代だと思う。今の土地は当時畑であり、農地開放で当時の小作人に売り渡されることになったが、その小作人が非農家のため直接買うことができなかった。その時に、当時の農業委員が骨を折って、買うけることができるようになった。

そのかわり、土地の一部を消防小屋と火のみやぐらとして、無償で借りうけることになった。たしか念書もあるはずだ」と当時の経緯を語ってくれた。時代が変わり、当時の地主も亡くなり、今はその娘さんの代になり、そうした経緯もおらなくなつた。

現在の西谷町消防団に対しては、町内の住民は関心がうすい。それと、西谷町内には保土ヶ谷消防署西谷出張所があるからである。

「消防署があるから、消防団はいらないという人が多い。しかし、消防署は公共のものだから、西谷のものではないから、外になにかあるとそちらへ行ってしまう。いっぺんに災害がおきたら頼りになるのは地元の

消防団ではないか」という白井さんの言葉には、日頃から消防団への関心のうすい住民に対して、消防団の存在価値を主張しているように思えてならない。

こうして今までの西谷連合町会の活動から一線を画していた消防団―地付きの人は、地区センターの建設にからんで、思いがけずに連合町会と関係をもたざるをえなくなった。西谷連合町会長の中山さんが言っているように、消防小屋の移転問題は連合町内会の焦眉の課題である。同時に、今まで互いに一線を画していた連合町会と消防団が共に乗り越えてはならないハードルでもあ

●さぐりに

―西谷町の活性化の条件とは……

―ぶつかりあうことが必要―

西谷町は西谷駅を中心に〇・六二平方キロメートル、駅まではどこから歩いても十五分程でいける。西谷町はそれほど大きな町ではない。こ

の町の中で、連合町会、商店会、消防団はそれぞれの立場で、お互いのつながりをあまり考えずに、今までは活動を続けてきた。そうしている中で、西谷地区センターがオープンした。地区センター建設に伴う消防小屋の移転問題がおこり、連合町会、消防団ともに、お互いにかかわりをもたなくてはならなくなった。一方、商店会も、売上げが減少している中で、地区センターのオープンをきっかけに、商店会の環境整備や人の集まる地域イベントの展開を模索しはじめた。この三つの組織がもつとかかわりをもつていくためには、もつとお互いにぶつかりあう場をもたなくてはならないだろう。

今の西谷町の活動をみると、「おとなしい」という印象がある。

この「おとなしさ」は、今では地域活動の支障になり始めている。この「おとなしさ」を一度ひっくりかえしてみなくてはいけない。そして、このことが必要なのは、西谷町を担っている三つの組織の人々ではないだろうか。まずぶつかりあうこと、

西谷地区センター

「自主事業（掲示板関係）の取り扱いについて」

- ・原則として10名程度以上とする。
- ・講師には、センターからとして謝金を1回目に限り、種別、期間を問わず5000円を支出する。その後は、会員が会費の中で自主的に処理することとし、基本的には材料費だけが原則。
- ・この種の自主事業は、同一月について、2回目までは使用可能。初回のみセンター側で設定する。従って、2回目以降は自主的に団体申し込み手続きをとる。
- ・第1回目は説明会という主旨から協力費は不要(申し込み書不要)この自主事業は、原則として年度末までの期間を限度として終了し、その後は、自主事業から切り離す(61年度分)
- ・この種の自主事業を今後拡大していくと、月2回の利用等を考えた場合、一般の利用が制約されて来られると思われるので、同一年度としては、5種類前後の事業に止どめる予定である。
- ・10名程度に及ばない場合は、既存グループへの紹介は可能な限り行うこととするが、センターとしての自主事業としては取り扱わない。従って、前述のように部屋の設定、初回の無料扱い、謝金等の措置は行わない。
- ・昭和61年11月1日から実施する。

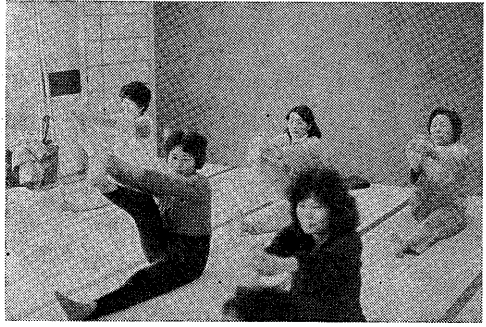
そこから西谷町の活性化への糸口が
つくられるのであろうから。

―もっと底辺の広がりをも

今回、西谷町の地域活動の調査をしてみて、どこの町にも組織されている町内会や子供会といった既成の組織の活動は見聞きできたが、西谷町内で活動している自主活動グループを見つけることはできなかった。

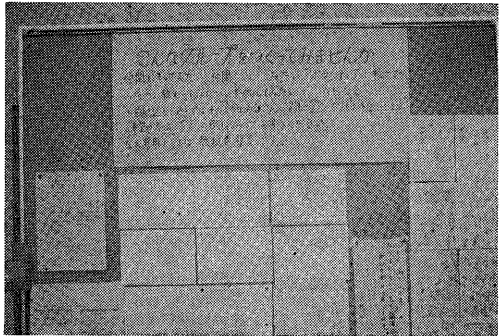
地区センターの利用者名簿を見ても、スポーツのグループはけっこうあるが、地域での子育てグループ、ボランティアグループといった自主活動グループはほとんどない。わずかにあったものも、西谷町という町を大きく越えて組織されているグループであった。こうした行政とはあまりかかわりのない自主活動グループが様々に組織され、目に見えな

地区センターのヨガ風景



は、西谷町の場合はまだ育っていない。重層性は、いつなかりをつくっていく。

地岡センターの情報コーナー



い。それでもわずかではあるがその萌芽は出はじめている。

西谷地区センターの佐和山館長によると、西谷地区センターでは、地域の自主性を育てるため、他の地区センターで行っているような、地区センターが各種教室を主催し、それに地域の人々が習いにくるといふやり方はとらないことにしたという。代りに、地区センター内に情報コーナーをつくり、グループをつくりたい人、技術を習いたい人の名簿をつくり、希望者はそこに記入する。他方そうした技術を教えたい人を募り、それぞれを仲立ちする役目を地区センターが担う。そして、場所の

提供は地区センターで保証するが、その後の運営はそれぞれのグループの人にまかせていくという方法をとっている。

こうした努力が続けられ、西谷町内に様々な自主活動グループが生まれ、こうした活動の中から人と人のネットワークができ、将来の地域リーダーが生まれてくる。こうした底辺の広がりがあったこそ、はじめて既成の組織である三つの組織が互いの利害を越えて一歩踏み出すことができるようになるだろう。八保土ヶ谷区政推進課調整係V